

名大生のための楽興の時

～「レクチャーコンサート」のこと～

藤井たぎる 名古屋大学大学院国際言語文化研究科教授

愛知県立芸術大学音楽研究科博士後期課程に所属する演奏家たちを講師として迎え、2013年度から名古屋大学教養教育院ですべての学部生と大学院生を対象にした「レクチャーコンサート～名大生のための音楽史入門」が開講されている。前期は丹下聡子さんと七條めぐみさん、後期は高木彩也子さんと白石朝子さんに、ルネッサンス・バロックから現代まで、毎回、講義と演奏による充実した90分を、ゲスト演奏家との共演も交えながら提供して頂いた。4時半開始の5時限ということもあって、夢見心地で楽興の時を過ごしてしまっている姿もちろほら見られたものの、受講生の多くは予想どおり、なんらかの楽器の経験があって、レクチャーと演奏に熱心に耳を傾けていたし、なにより、授業後質問に訪れる“常連”たちとの対話や談笑のひとつときは、音楽を媒介とした演奏家と聴衆の理想的なコミュニケーションの場となっていたように、この授業科目のコーディネーターという名目ですべての授業を聴講することのできた私には感じられた。

いや、この授業でいちばん恩恵を受けたのはじつは私だったのかもしれない。フランス・バロックとJ. S. バッハとをつなぐミッシング・リンクについての興味深いレクチャーの後、バッハを演奏して下さった七條さん。音楽を楽しむのに理論や分析など必要ない？ とんでもない。しかるべき歴史的パースペクティヴのもとで音楽作品を聴く体験は、たとえば使用楽器（チェンバロかピアノか、ピリオド楽器かモダン楽器か）の選択の問題よりずっと重要であるということに、そのレクチャーと演奏であらためて気づかされたのだった。それからフルートの構造的な発展と創作との相関性についてインフォーマティヴな話題を提供して下さった丹下さん。授業の後半では、たっぷりとフランスと日本の20/21世紀作品を紹介し、演奏して頂いた。とくに成本理香さんによって丹下さんのために書かれた〈Six Studies for alto flute〉が一部抜粋で演奏さ

れたときは、作曲家ご本人も友情出演してくださり、創作の舞台裏をお二人の対談からうかがい知ることができた。余談だが、丹下さんの「学位申請リサイタル」（2013年12月）におけるこの成本作品全曲と、ピアノの加藤希央さんとのデュオによる平義久の〈Filigrane I〉の演奏は本当に素晴らしかった。後者は、ピエール＝イヴ・アルトーによる演奏をCDで聴いたことがあるが、もはや二度とアルトーで聴き返すことはないだろう。

そして（これを書いている時点でまだ終わっていない）後期では、スカルラッチィをピアノで聴くことの喜びを教えてくださいました白石さん。クーランやラモー、あるいはスカルラッチィをピアノで弾くなんて邪道だと信じ、いまは亡きクラヴサン奏者スコット・ロスによる演奏をこれまで好んで聴いてきたのだが、白石さんが醸し出すスカルラッチィ（K29とK247）の斬新な和音の色彩感、ロスをもってしてもチェンバロでは限界があると思えるほどにモダンだった。それからドイツ・リートの魅力を楽曲分析と実演で伝えてくださった高木さん。フィッシャー＝ディースカウの歌が苦手、というか嫌い、で、たまたま学生時代にロラン・バルトのエッセイ「声の肌理」を読んで溜飲を下げて以来（なにしろ、お読みになった方はご存じのように、あれほどフィッシャー＝ディースカウを悪しざまに、そしておそらくは的確に批評した評論はほかにない！）、たとえばラヴェルの〈マルメの詩による三つの歌曲〉ならいろいろな歌手で繰り返し聴くことはあっても、シューベルトやシューマンの歌曲には、歌手がだれであろうと、二度と耳を傾けることはなかった。そういうわけで、何十年ぶりかで高木さんの歌で聴くことになったのだが、詩の行間の意味を自信たっぷりに解釈して歌い上げる（ように少なくとも私には聴こえる）かのバリトン歌手（およびその類い）からはついぞ味わうことのできなかった、詩の言語自体のもつ音の色艶（バルトなら「肌触り」と言うだろう）がそこにはたしかにあった。歌われているのに、語られているように聴こえるというか、ヴォルフに限らず言葉の響きがそのままメロディーとなって立ち上ってくるような風情なのである。

頑丈な二重扉によって隔離された遮音性だけが取り柄のスタジオで、響きはいたってデッドなので、ピアノはまだしも、フルートや歌にはかなり過酷な環境だし、改善も望めそうにない。ただ、響きの良いホールで離れて聴くのととは

また違ったそれなりの利点も、このスタジオにはある。スタジオの隅にいても、音がいまそこで生み出されようとしているその瞬間の気配のようなものが奏者の身体から伝わってくるからだ。そうしたリアルな生(なま)の感覚を取り戻すための音楽工房でもあるこの「レクチャーコンサート」は、引き続き2014年度も、前期は丹下さんと高木さんに、後期は白石さんとフランス留学中の七條さんに代わって深堀彩香さんに担当して頂くことになっている。